

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	内間 望	指導教員 (主査)	小野寺 敦子

論文題目	大学生の将来考案力を促す要因の検討 —親の養育態度・体験活動および重要他者との関わりに着目して
------	--

本文概要

【問題】私たちは、将来のことを考える際、必要となるであろう資源や起こり得る出来事を推測し、現在の活動や将来の計画を変更する必要があるか否かを考え、今後のことを決定する。将来のことを考えるという能力は、心理学領域では、時間的展望という概念を通して研究されてきた（都築，1993；白井，1994 など）。また、計画の立て方についても、1980 年代初期から研究されてきており、長年、必要とされてきている研究テーマでもある。しかし、これらの先行研究では、計画を立てるために必要な能力についての研究結果が乏しいという側面もある。一方、本邦では、家庭の経済状況を理由に希望の進学を断念する学生が多いことや（ライセンスアカデミー，2010；長谷川，2009）、学生の学力の低下が問題視されている（片岡ら，2012）。文部科学省（2018）は、これらの本邦の現状を整理した上で、しっかりとした進路への意識や進学意欲があれば、家庭の経済状況にかかわらず、大学や専門学校等へ進学できるチャンスを確保することができると結論づけた。他方、Wilensky, R.（1983）は、人間のプラン生成実行システムを4つのサブシステムから構成されていると推論した。以上の先行研究から、本研究では、自分の将来について、自分の現在の状況を把握し、現実的な選択肢の中で将来について考える能力に着目し、これを本将来考案力と名付ける。将来考案力を構成する下位能力として、Wilensky, R.（1983）にならい、現実にはあらゆる制約があることを認識する能力、立てた計画を実行すると事態がどうなるかを予測する能力、認識した制約に折り合いをつけ、新たな道を見付けられる能力があると思われる。それでは、この将来考案力を促す要因は何なのだろうか。本研究では、親の養育態度・体験活動頻度・重要他者の存在を促進要因として挙げ、その関連を検討していく。

【目的】本研究では、将来考案力を促す要因を探索的に検討することを目的とする。その際の要因として親の養育態度・体験活動頻度・重要他者の存在を用いる。

仮説 1：親の自立促進的態度が高いと将来考案力も高い。

仮説 2：体験活動頻度が高いと将来考案力も高い。

仮説 3：重要他者が多い人ほど将来考案力が高い。

【方法】大学生を対象に、パソコンやスマートフォンを用いた Web アンケート調査を実施した。調査項目：①将来考案力、②体験活動尺度、③母／父親の自立促進的態度尺度、④重要他者の意味尺度、⑤日本語版 WHO-5 精神的健康状態表簡易版、⑥フェイスシート。

【結果・考察】大学生は、異性の親との対等な会話（子どもを大人として認めて行う会話）をすることによって将来を計画する力が育つということが示された（仮説 1 は部分的に支持された）。特に、女性は、ボランティア活動などの福祉的な奉仕行動をすることで計画力が高まり、男性は、理論的な思考をする機会の多い文化的な活動をすることで計画力が高まるという結果も示された（仮説 2 は部分的に支持された）。また、親との関わり以外にも、男性は、これまでどのような側面で重要だと思える他者との関わりをもってきたのかという経験が、現在の自分の状況を把握することに繋がり、女性は、重要だと思える他者の人数が多いほど自分の現状を把握しやすくなるという結果が示された（仮説 3 は部分的に支持された）。これらの結果は、大学生の就業・進学支援に活用できる知見であると考えられる。